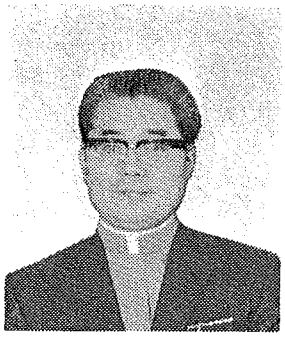
英知通信

昭和51年5月20日　英知大学　No.16

「英知への愛」

学長　岸　英司



一、入学おめでとう

夜来の雨もあがり、すがすがしい今朝、ご来賓及び多数のご父兄の方方のご参列を頂き、教職員、在学生と共に英知大学入学式を挙行いたしますことは、本日入学された皆さんをはじめ本大学の教職員、在学生一同にとりましてまことに大きな喜びであります。

私はここに本大学を代表し、入学生の皆さんにおめでとうと申し上げます。皆さんは今日からこの大学において四年間の大学生活を始められますが、皆さんを取りまく日本及び世界の状勢は不安定であり、決して平穏なものではないと思います。

しかしながら、人生及び世界の歴史はいつの時代でも変化の中にあったのでありまして私たちはどんな時にも真理を求め、真理において生きる心構えを失ってはなりません。現代人の多くが大学を出て始めて社会に出るという意味において、大学は人の人生における最後の学校であります。従って私達は学校で学ぶこの最後の機会をよりよく利用しなければなりません。

私は今日、皆さんのご入学を祝って少しばかり大学についてお話しいたしたいと思います。

二、大学の理念

ご承知のように、今日のような大学が人間の歴史に姿を表わしてきましたのは、ヨーロッパ中世十二世紀の終わりであります。中世における大学の創立は宗教的なものと結ばれていたのでありまして、大学は神学の研究に端を発しており、他の諸学、哲学、法学、医学がこれに加えられました。

大学の理念は教授と学生との生命的協同と共に学問の綜合ということでありまして、大学は一つの特別なる社会を形成し、それ故にこそ、正しく、UNIVERSITAS UNIVERSITY と呼ばれるに至ったのであります。

英知大学はカトリック大学であるが故に、幸いにも中世紀にはじまった大学と同じく、神学部から始まりました。今日でも、小さな大学ではありますが、神学科を含む文学部として存在しているのであります。

三、建学の精神・英知への愛

さてすべてを分けへだてしない普遍的精神こそ、カトリシズムの基調であり、それゆえ本大学は狭き国家主義の立場に立ちつつ、しかも単なる人間中心ではなく、人間を超越者なる神と結ぶ知恵である英知（サピエンチア）を建学の精神としております。

先ほどお読み頂いた「知恵の書」には英知について説かれておりますので、これを手がかりとして英知サピエンチアはいかにして獲得されるかについて考えてみたいと存じます。

第六章十二節には「英知は輝かしいもので、その艶を失うことがない。それを愛する人は、たやすく見つけ、それを探し求める人は、見出す」とあります。「知恵の書」の記者は英知を讃美し、英知は輝かしいものだと言っております。そして、それを愛する人はたやすく見つけ、それを探し求める人は見出すのであります。ここに英知を知る鍵があります。英知は単なる学問的知識ではなく、知識を超えた知恵のことでありまして、人間が本当の意味で生きるのは単なる知識ではなく知恵によるのです。これが仲々見出せないのは結局それを愛さないからだというのが知恵の書の教える所でありましょう。

十七節に「英知の確実な始まりは、それを学びとろうとする望みであり、学びとろうとする望みは、それを愛することだ」とあります。

今、皆さんは、心から学ぼうという望みに満ちておられるに違いありません。ところが望みは容易く消え去ってゆくものでもあるのです。もしも、そこに「それを愛する」という確乎たる意志の働きがない場合には—そうなのです。愛とは一般に考えられているように単なる感情ではありません。それは好き嫌いを超えた忍耐ぶかい意志の働きなのです。

皆さんは大学における研究生活の間、「知恵の書」の教えている様に学問的知識を求めるのみならず、英知を求め、英知を愛する人になられる様希望してやみません。

四、セデス・サピエンチエ

さて、今日入学された皆さんは大学の新館西に掲げられた大理石の聖母マリアとその御子キリストの像をごらんになったことでしょう。そしてその下にある、SEDES SAPIENTIAE の文字も読まれたことと思います。この像、この言葉は本大学の象徴であります。

SEDES SAPIENTIAE の文字通りの意味は「英知の座」SEAT OF WISDOM でありますが、これを今もっと広く「英知の場」と言ってよいかと思います。これこそ大学なのです。

キリストは真理の光であり、英知サピエンチアそのものであり、それを抱き、養い育てる母、アルマ、マーテル、こそ聖母マリアであり、セ

デス・サピエンチエであります。一般に学校が人間にとって母校アルマ・マーテル（ALMA MATER）と呼ばれるのは聖母マリアと無関係ではないのです。いつくしみ深き母マリアは大学をはじめすべての学校の象徴なのであります。

大学は申すまでもなく学問研究を通しての人間形成の場であり、皆さんはここ英知大学において国際的には幾多の姉妹校と結ばれ、また大勢の外人教授との人格的接触を通してのインターナショナルな環境における大学生活を今日はじめられたのであります。ここでご列席のご父兄の方々に一言申し上げます。皆様のご子弟のご入学さぞかしご満足の事と存じます。これからはご子弟のご卒業まで、後援会を通してのご援助は勿論のこと、大学と家庭との協力によりまして、その目的が達成され、暖かいご協力を賜りますよう心からお願いいたします。

入学式の祈りにおいて皆んな一諸に祈りました様に、これからの四年間も共に英知サピエンチアを求める祈りと行動において一つとなりながら、学問に励んでまいりたいと存じます。

終りに皆さんの大学生活の上に、神の祝福を祈りながら式辞といたします。

昭和五十一年四月七日

家庭的で親しみやすい雰囲気

― 新顧問　土田義和氏に聞く ―

本学は四月一日付で土田義和氏を本学顧問として迎えた。土田氏は昭和三年に東京帝国大学文学部哲学科を卒業、文部省嘱託を経て、旧制新居浜高等工業学校（後の旧制新居浜工業専門学校）の教授を十年ほどしておられた。その後北海道大学、神戸大学、鉄鋼短期大学の事務局長として約二十年勤められた、文字通りの事務管理職のベテランである。

そこで総務部長室に土田顧問を訪ねて本学についての感想を卒直に語っていただくことにした。

―本学に来られての第一印象は―

「以前から何度もやってきておりますし、学長とも個人的によく存じ上げておりますので、初めてのような気がしないんです。学校としましては上品な雰囲気ですね。昼休みなどに学内を歩いていてもタバコを吸っている学生にあんまり出会ったことがありません。」（さぞかし耳の痛かろう諸君もおられるのではないだろうか）

―本学の「良さ」については―

「何といっても規模が適正で、家庭的で親しみやすい点であると思います。非常に良い印象を受けております。」

―これからの抱負をひとこと―

「宗教的な大学は初めてなので、少少とまどっておりますが、学長の手助けにでもなれば幸いです。」

ひかえめに話される土田さん、教員時代はカント哲学を教えておられたそうだ。趣味は園芸で、特にバラがお好きでご家庭で大輪のバラ作りに励んでおられる。また囲碁は五段将棋は「我流ですが―」と謙遜されるが、察するところ相当の腕前であるとお見受する。我と思わん方は挑戦してみては――。日頃は総務部長室で静かに事務をとっておられる。

オーストラリアへの夏期語学研修旅行を企画

欧米諸国への海外旅行も頻繁に行われるようになった今日この頃、このたび本学ロバート・ウエスト助教授主催によるオーストラリアへの語学研究旅行が企画されている。

全日程は八月五日から八月二十二日までの三週間。コアラでおなじみのオーストラリアでは世界の三大美港として知られているシドニーとブリスベーン、緑の豊庫ニュージーランドではオークランドをはじめとしてワイトモ、ロトルア、クライストチャーチ。南海の楽園と呼ばれるニューカレドニアでは南十字星の見おろす町ヌメアをそれぞれ見学する予定である。英語を実際に使用しながら、オーストラリアの大自然を大いに満喫しようというもの。

費用は一人あたり三十五万八千円（ローンも可）で、これには航空費宿泊料金が含まれる。申し込み最終締切日は六月二日となっているが三十五名定員であるのでお早めに。

お問合わせ、お申し込み先はロバート・ウエスト助教授（〇七九七―七二―五一八六）、あるいは近畿日本ツーリスト（二〇五―二五六）まで。

昭和五十二年度入試に第二次募集を撤廃

―全学科とも推薦入学に英語―

四月二十二日に行われた教授会で、来年度の入試要項がほぼ決定された。それによると、推薦入学の場合、全学科とも従来の論文、面接に加えてあらたに簡単な英語のテストを行う。またこれまで行われていた二次試験を廃止することになった。

人事

新任

英文学科講師　ダニエル・グリッフィン　四月一日付

顧問　土田義和

退職

神学科助教授　西尾正二　四月十日付

卒業記念品を母校に寄贈

昭和五十年度卒業生一同より、左記の品を卒業記念品として寄贈された。

一、額　壱面　神学科
一、けやき　壱本　英文学科
一、檜　三本　イスパニア文学科
一、メタセコイヤ　五本　フランス文学科

卒業生一同の厚意にたいして心より感謝の意を表したい。

昭和五十一年度入学者出身高校

本年度入学者二七七名のうち大阪府44%、兵庫県38%を占め詳細は次のとおりである。（）内は二名以上。

公立高校

須磨(7)　吹田(5)　川西緑台(4)　高砂(4)　夢野台(4)　門真(3)　桜塚(3)　鈴蘭台(3)　明石南(3)　鳳(3)　神港(3)　伊丹(3)　尼崎東(3)　勝山(2)　堺(2)　扇町(2)　阪南(2)　清友(2)　西商業(2)　宝塚(2)　福崎(2)　尼崎(2)　尼崎西(2)　西宮(2)　葺合(2)　赤塚山(2)　御所(2)　一條(2)　佐野、南、貝塚、桜宮、箕面、東旭、堺市立商業、河南、東淀工業　布施、八尾東、東淀川、堺東、花園、枚方、佐野工業、泉尾、明石北、鳴尾、御影、明石、三木　尼崎小田、姫路工業、兵庫商業、飾磨、琴丘、尼崎、神戸西、桂、福知山、東舞鶴、一條、五條、高田、奈良工業、佐沼、上田千曲　勝山、敦賀、尾道東、向原、堺港工業、新野、大里、種子島、嶺北　水島、金沢錦丘、江津、松江工業　検定、

私立高校

清風(9)　仁川学院(8)　関西大倉(7)　プール学院(5)　大阪女学院(5)　百合学院(5)　三田学園(5)　神港(5)　清教学園(4)　樟蔭東(4)　大谷(4)　上宮(4)　北陽(3)　賢明(3)　成器(3)　桃山学院(3)　大商大付属(2)　箕面自由学園(2)　四条畷学園(2)　四天王寺(2)　宣真(2)　明星(2)　兵庫県播磨(2)　甲子園学院(2)　八代学院(2)　報徳学園(2)　愛徳学園(2)　村野工業(2)　啓明女学院(2)　賢明女子学院(2)　聖カタリナ女子(2)　星光学院、啓光学院、大阪、大鉄　城星学園、太成、浪速、大阪商業　大阪女子学園、羽衣学園、大阪貿易学院、梅花、大谷、被昇天、神戸野田、育英、成徳、日ノ本学園、親和女子、平安女学院、日星　暁星女子、洛南、延暦寺比叡山、信愛女子短大付属、帝塚山、崇徳　広島国泰寺、長崎純心女子、九州学院、緑ケ丘学園、函館ラサール、明法、中部工業大学付属。

比較文学談義

大西忠雄
（フランス文学科科長）

「比較文学とは何か？」とよく聞かれます。その都度いささか説明に苦しむのですが、その理由はこの先で申し上げます。但しひと口で答えるとすれば、「比較文学とは読んで字の通り、文学を比較する研究又は学問だ」とでも言えますが、これでは勿論満足な解答にはなりませんので、順を追ってやや詳しくお話いたします。まず問題は比較文学という名前のことですが、これは、仏語の学名 "Littérature Comparée" もしくは英語の "Comparative literature" から来たものと見ていいでしょう。次は、仮りに文学を比較するとして、ではどのような文学を比べるのかという事ですが、これは文学であれば何でも比較するというわけではなくて、比較文学で比較の対象となるのは、もっぱら異なる国々の文学なのであって、例えば一国内の文学の比較はこの研究では扱いません。この点比較文学は「比較言語学」、「比較心理学」「比較法学」等々の学問と大体事情を同じくするものと思われます。さて第三点は比較文学における比較という言葉の意味ですが、これが少々難問題で先に説明に苦しむと申したのも実はこの点なのです。というのは比較の対称が何であれ、物を比較するということは、比較される物同志の類似性とか相違点を取り上げるのか、又は真の間の優劣を論ずるとかするのが一般ですが、比較文学は右のような比較を目的とはしないからです。では一体何の為に文学を比べるのかという事になりますが、実は比較文学では異なる国々の文学を比べ、その間のつながりを発見し、これを追求するのを目的といたします。異国間の文学的つながりとは、結論的に申しますと、その間の影響関係ということです。繰返すようですが、比較文学なるものを説明し難いのは、このような事情によるもので、この場合比較というのは、比較そのものが目的ではなくて、文学的影響を見出すためのいわば手段、ないし方便に外ならぬという事になります。これが比較本来の役目といえるかどうか、従って比較文学と呼ぶのは果して適当であろうか、という疑問が当然おこります。まさにその通りであって、この比較文学という呼名は一概に誤りだとは言わないまでも、少くとも誤解を招く恐れがあるのは否定できません。現にこの事は内外の比較文学者からも度々指摘されているので、例えば仏国の比較文学者（Comparatiste）M・F・ギュイヤールはその著作「比較文学」（"Litterature Comparée"）の序文の中で、例えば「シェクスピアとラシーヌの共通点を語るのは「批評雄弁の領域」に属するが、「シェクスピアがモンテーニュから」得た知識を「自らの劇にどう用いたかを調べる」のは「比較文学」であると述べてから、「比較文学は比較ではない。これは不適当に名付けられた科学的方法の一つにすぎない。国際間の文学的関係の歴史と定義すればもっと正確になる」と言っています。

またギュィヤールの先生格で先輩の仏国比較文学者J・M・カレも前記著書に寄せた諸言で、比較文学の観念への新たな検討の必要を強調して次のように述べています。

「比較文学は文学の比較ではない。それは……ヴォルテールとルソーとの比較対照をそのまま外国文学の面に移すようなものではない。比較文学は文学史の一分野である。」なお、これに加えて彼は比較文学の具体的研究事例を幾つか挙げていますが、長くなるので省略いたします。

以上は偶々比較文学の発祥国フランスの代表的比較文学者の言葉を援用したものですが、比較文学が『文学の比較』ではない」とは両者共に言明しており、次に前者はこれ「国際的な文学関係の歴史」と言い、後者は「文学史の一分野」と言っております。両人の言説を総合・要約すれば比較文学とは一応「国際文学史」ということになります。「国際文学史」とは言い換れば「文学の国際的つながりの研究」で、先に小生が申し上げた文学の国際的影響の研究に外なりません。

比較文学の定義で聊か手間取りましたが、ただここで一言断っておきたいのは、(1)比較文学という必ずしも適切でない名称は、半ば習慣的のもので、その由来は欧州特に仏国の比較文学成立以来の歴史的事情に基ずくものであること（この詳細は省きます）及び(2)右の比較文学と並行して、異なる国々の文学を比較対照する研究―これを対比研究といいますが―も勿論存在し、現に文学研究・批評等にもこの方法が用いられていることであります。（ちなみに米国語では右の対比研究をも広く比較文学の領域に取り入れているようです。）

さて文学の国際的交流による相互影響の研究が比較文学であるのは以上の通りとして、では何故にこの研究が必要て重要なのかという事ですが、この理由は改めて言うまでもないと思います。勿論詳論すればしばしば議論されますが、およそ現に世界諸国の文学が、一国内だけでいわば孤立して生長・発展するのは稀でありまして、その創造・成立の過程で度々何らか外国の文学・思想・文化等の影響を受けている現実を考えれば、比較文学研究の存在理由と重要性とは自ら明らかでしょう。つまり一国の文学を理解するには、単にその国の国文学史の研究のみでは充分ではなく、それを超えたより広い国際的視野からの研究が要求されるゆえんであり、卑近な例を我国自身の文学に取ってみても、近代以前、すなわち万葉の昔から徳川時代までは、主として隣国中国文学の影響を、近代以後今日に到るまでは、西欧文学の影響を夫々多分に受けております。従ってこれら中・欧諸国からの影響を解明するのは、日本文学の生長・発展への理解を進め深める為の重要な一つの鍵となるわけであります。

以上私はもっぱら文学の国際的影響を問題としましたが、文学への影響と言えば、右の外国からの影響以前にもしくはそれと同時に、国内の影響もあるわけです。従って一国の文学を具体的にいえば文学の作者及び作品を理解するには、当然この国内の影響も考えねばなりません。この研究は―それは時にその国の文学的伝統・風土等の研究とも一致しますが―いうまでもなく当国の国文学史の領域に属します。国外の影響研究が国際文学史すなわち比較文学の仕事であるのは、繰返すまでもありません。先にJ・M・カレが「比較文学は文学史の一分野」と言っているのも実はこの間の事情を物語るものです。では国内・国外文学史のいずれが大事な研究か、という問題ですが、これには両者共重要だと答える外ありませんけれども、むしろこうした比較よりも、問題は右両文学史が文学作家・作品の解明という共通目標に向って、文学研究の場を夫夫で分担し合っているという事情にあります。

およそ文学研究の途は決して一つではなく、また真の立場・方法等も各々異なっています。しかしそれらがめざす所が、可能な限り文学創造の秘密を追求するという点ではおおかた一致するようです。比較文学元よりこの例外ではない、その研究対象が文学の国際的影響であるのは今更言うまでもないのですが、比較文学はただ無方針に、漫然と影響を云云しているのではなく、この影響が作家・作品の文学創造と、どのように関わり、つながっているかを探る事によって、出来る限り文学創造の核心に迫ろうというのが、実は研究の究極の目的に外なりません。ただし比較文学を以てすれば文学創造の秘密がすべて解明できるなどというのではない。世の文学作品必ずしも外国の影響だけで成立しているわけではないからです。比較文学を文学理解への重要な鍵の一つと申したのはこの意味で、比較文学必ずしもそれほど全能ではありません。しかし文学創造の秘密などという複雑で難解な問題に関しては、世の文学研究・批評などいづれも比較文学と大同小異と言えそうです。

さて、そろそろこの辺で、比較文学の具体的研究の論文に入らねばならないのですが、その前に比較文学の研究方法の問題について一言触れておきたいと思います。方法論などと申しますと、とかく話が固苦しくなり、退屈な議論にもなり兼ねませんので、ごく簡単に申し上げます。実は比較文学と言いましても、何も格別な新しい研究方法があるわけの

ものではありません。もちろんこの研究を進める上での、細かな具体的手続きや手順などないわけではありませんが、基本的にはそれは、先に引用いたしましたF・ギュイヤールが述べているように、「科学的方法の一つ」に外なりません。また先にもどりますが、J・M・カレーも述べておりますように、比較文学が「文学史の一分野」であるとすれば、その研究方法も文学史のそれと本質的に異なるものではありません。これについてはいわゆる「文学史的」研究方法に論及しなければならないと思うのですが、長くなりますので、ここでは詳論を割愛いたします。ただ前述の「科学的方法」（ギュイヤール述）ということですが、これはいわゆる科学―特に自然科学―そのままの研究方法という意味ではなくて、文学が研究の対象である場合、それは可能な限り、確実な文献その他の資料に基いて、厳格な実正的精神ないし態度をあくまで貫く研究を意味するものであって、この点比較文学が、研究者または比評家の独自の主観的印象や解釈等に依拠し、時には独断的な判断や評価などを許容する他の文学研究・文芸批評などとは、いささか異なるゆえんであります。ことわっておきますが、これら比較文学以外の研究や批評の存在理由やその価値を小生決して否定しているのではありません。以上比較文学の定義・研究方法・限界等のあらましを述べた所で、余白も少なくなりましたので、最後の部分は駆足ですませました。意をつくさず恥しいものですが、拙論の序論としてでもお読みいただければ幸甚です。

岩国美弥子さん

ミス・ユニバース日本代表に決定

去る四月七日、大阪のABCホールで開かれたミス・ユニバース日本代表選出大会において、本学英文学科二回生岩国美弥子さんが日本代表に決定した。決定後初めて本学を訪れた岩国さんは、「当日キレイな方ばかりでびっくり。自信は全くなかった。とにかくあがってました。」と当日の感想をひとこと。またドレスの丈が長かったので本番前に裾を切ってもらったと舞台裏をチョッピリ披露。今でも実感としてはピンとこないが、王冠の重みを感じるという。学校に来れないのが一番残念と学生としての自覚もチラリとのぞかせた。春らしいセーター姿に首に結んだ赤いネッカチーフが印象的な岩国さん。さりげない服装の中にもミス・ユニバースとしての自信と誇りがうかがえる。

七月十一日の世界大会をめざしてよりいっそう美しさにみがきをかけがんばってもらいたいものである。

新図書館・大学チャペル建設着工へ

本学では、大学全体の発達と、研究のための規模充実をはかるため、新図書館を建設することになった。予定としては、建築総面積七〇五坪一階が書庫、貴賓室、応接室、特別閲覧室、ラウンジ、機械室、倉庫。二階が館長室、開架閲覧室、特別閲覧室、書庫、目録ホール、事務室、ロッカー室、ラウンジ、コピー室、倉庫、休憩室、湯沸室。三階が教授ラウンジ、教授閲覧室、一般閲覧室書庫、テープ保管室、マイクロリーダー室。一階チャペルは三〇坪、鉄筋コンクリート三階建である。閲覧室は現在の八〇席から一五〇席へ増加、収容可能冊数一五万冊以上となる予定。また大学チャペルは五〇名収容可能になる。

研究室便り

○本多正昭兼任講師（倫理学・道徳教育の研究）は、四月一日、関西大学において開かれた日本基督教学会近畿支部で「神学と哲学」（シンポジウム）―アナロギア、イアギニスをめぐって―というテーマのもとに研究発表を行った。

また、六月十二日に九州大学において開かれた九州大学哲学会で「トマスの存在概念と仏教的無について」というテーマで研究発表を行った。

○玉谷直実助教授（心理学）は、「声」五月号に「ぐうたらママの行く末」を発表した。これは現代日本における母親の問題点を指摘したものである。

昭和50年度受入冊数及び所蔵冊数

	人文科学関係		社会科学関係		自然科学関係		英語・英文学関係		イスパニア語イスパニア文学関係		仏語・仏文学関係		神学関係		保健体育関係		その他		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
受入冊数	520	71	131	7	36		164	181	17	346	40	139	133	509	2		190	78	2564
所蔵冊数	5379	1445	3390	612	1621	81	2903	4548	277	5412	1295	4308	2589	7734	360	1	2604	673	45232

図書館報告

昭和50年度入館者および利用図書冊数統計

入館者数	11,497 人
開館日数	267 日
一日平均	43 人
館外帯出	3,387 冊
館内閲覧	546 冊
計	3,933 冊

英知大学神学科主催

神学講座についてのお知らせ

英知大学神学科では、カトリック神学を学びたい社会人（学歴不問）のために、毎週火曜日、神学講座を開いている。

これは本学神学科教授陣によって神学の各専門分野をわかりやすく解説して提供するものである。

全講座を聴講し、試験に合格した者には、カテキスタ免許状が授与される。

なお詳細は本学神学科神学講座係まで。

英知通信
昭和五十一年五月二十日発行
編集・発行者　英知大学学長広報室
兵庫県尼崎市若王寺苗田一〇〇の一
☎(06)四九一―五〇八三
FAX六六一